

伊藤正文著

〔東洋學叢書〕

建安詩人とその伝統

刊行
創
文
社

伊藤 正文 (いとう・まさふみ)

1925年大阪府に生まれる。1948年京都大学文学部卒業。同年神戸経済大学予科に勤務し、神戸大学講師、助教授などを経て、1979年同大学文学部教授。1988年関西大学文学部教授、神戸大学名誉教授。1995年関西大学退職。2000年逝去、享年75歳。
〔著書〕『曹植』(中国詩人選集)岩波書店、『王維』(中国の詩人)集英社、『漢魏六朝唐宋散文選』(共著、中国古典文学大系)平凡社、『漢魏六朝詩集』(同)など。

〔建安詩人とその伝統〕

二〇〇二年一月二〇日 第一刷印刷
二〇〇二年一月二五日 第一刷発行

著 者 伊 藤 正 文

発 行 者 久 保 井 浩 俊

印 刷 者 藤 原 良 成

発 行 所 鉄 創 文 社

〒101-0003

東京都千代田区麹町二一六―七

電話〇三―三三六三―七二〇一

振替〇〇二二〇〇―九二四二二

<http://www.sobunsha.co.jp>

著作権者との申し合せにより検印省略

藤原印刷・鈴木製本

ISBN4-423-19256-X

Printed in Japan

目 次

第一編 建安の詩

第一章 「巖巖鍾山首」篇	五
第二章 王粲伝論	二四
第三章 王粲詩論	六三
第四章 劉楨伝論	一五
第五章 劉楨詩論	一六
第六章 樂府——魏の武帝をめぐる——	一八
第七章 曹植とその詩	一七

第二編 南朝の詩

目 次	
第一章 鮑照伝論	二三
第二章 鮑照詩論	二六
第三章 魯迅と陶淵明——文学遺産の問題——	三四

第三編 杜甫の詩

第一章 杜詩における性靈	三三
第二章 杜甫の問題——開元天寶期——	三九
第三章 詩家としての杜甫	三七
第四章 杜甫と元結・『篋中集』の詩人たち	三九

第四編 盛唐の詩

第一章 盛唐の詩にあらわれた文学論の性格	四七
第二章 盛唐詩人と前代の詩人——盛唐における文学論の一面——	四〇
第三章 『搜玉小集』について	五三

初出一覧	五五
あとがき	五七
索引	五

CONTENTS

Part 1 Poetry in the Chien-an Era

1 On the Poem "Yen yen Chung-shan shou" by K'ung Jung	5
2 A Biographical Study of Wang Ts'an	24
3 A Study of Wang Ts'an's Poetry	62
4 A Biographical Study of Liu Chên	115
5 A Study of Liu Chên's Poetry	138
6 Yüeh-fu under Emperor Wu of the Wei Dynasty	188
7 Ts'ao Chih and his Poetry	197
Appendix: Ts'ao Chih	

Part 2 Poetry in the Southern Dynasties

1 A Biographical Study of Pao Chao	223
2 A Study of Pao Chao's Poetry	263
3 Lu Hsun and T'ao Yüan-ming: the Issue of Literary Legacies	314

Part 3 Tu Fu's Poetry

1 The Spirit of Tu Fu's Poetry	335
2 The Question of Tu Fu in the K'ai-yuan and T'ien-pao Periods	339
3 • Tu Fu the Poet	373
4 Tu Fu, Yuan Chieh, and the Poets of the <i>Ch'ieh-chung-chi</i>	395

Part 4 Poetry in the High T'ang Period

1 The Nature of Literary Theory in the Poetry of the High T'ang Period	427
2 Earlier Poets as Viewed by the Poets of the High T'ang Period: Aspects of Literary Theory in the High T'ang Period	460
3 A Study of the <i>Sou-yü hsiao-chi</i>	543

Postscript	577
------------	-----

Index	5
-------	---

建安詩人とその伝統

第一編 建安の詩

第一章 「巖巖鍾山首」篇

一

現在、孔融（一五三～二〇八）の作として伝えられる「雜詩」は、「巖巖鍾山首」と「遠送新行客」の二篇であり、それぞれの篇を「雜詩」其一・其二と題し、孔融の名を冠して収載したのは『古文苑』に始まる。

もともと「巖巖鍾山首」篇（以下「巖巖」篇と呼ぶ）に見える「幸託不肖軀、且当猛虎歩」の二句は、『文選』李善注によって、陳琳（？～二一七）の「為袁紹檄豫州」ほか三作品の語句の典拠としてそのまま引用されている¹が、「孔融雜詩」とは言わず、何れも「李陵詩曰」としるすのみである。

しかも、「幸託」の二句が李善注に引かれる以外には、「巖巖」篇の他の詩句及び「遠送新行客」篇（以下「遠送」篇と呼ぶ）の全句を通じて、「北堂書鈔」「藝文類聚」「初学記」及び「太平御覽」などの唐宋の類書にも、その引用例を見ない。従って「幸託」の二句以外の二篇の詩句、作者名及び詩題はすべて『古文苑』によってのみ、後世に伝承されたと言つてよい。かくて、「巖巖」篇と「遠送」篇の両者が孔融の作品であり、「雜詩」と題されていたとする証は、『古文苑』以外に求められず、全くの孤証に終わっている。その上、『古文苑』そのものがなお「孤証」たり得るかについては、多分に問題がある。仏寺の經龕の中から、北宋の孫洙（一〇三三～一〇八〇）に

よって発見されたといわれ、もと唐人の所蔵と称する詩文の類（『直齋書錄解題』）が、今本『古文苑』⁽²⁾の原型であつてみれば、遽かに信ずることは難しく、「其の真偽、蓋し得て明らむる莫し」（『四庫全書總目提要』）というのが実のところであろう。

しかし、明・清より現代に至る所謂「古詩」の總集の類、たとえば馮惟訥の『古詩紀』・張溥の『漢魏六朝一百三家集』以下、王士禎の『古詩選』（『巖巖』篇のみ）・沈德潛の『古詩源』（『遠送』篇のみ）・張玉穀の『古詩賞析』（『遠送』篇のみ）・王闓運の『八代詩選』・丁福保の『全漢三國晉南北朝詩』など、さては余冠英『漢魏六朝詩選』（一九五八年刊）に至るまで、『古文苑』にならつて孔融の名を冠し、「雜詩」なる詩題のもとに兩篇（あるものは一篇のみ）を収載し、その真偽について疑問を挟むことをしてはいない。

かくのごとく、「巖巖」篇・「遠送」篇自体の成立（特にその制作年代）及び作者名・詩題に関する信憑性が十分でないにもかかわらず、それにあえて異を唱えないのは、不注意によるのでなければ、真偽のほど、明らめ難いが故に、「過ぎてこれを存せん」⁽³⁾との配慮に基づくのであろうか。

この小論の意図するところは、上述の兩篇をめぐるその作者と詩題などの事実的な認定に必ずしもあるのではない。資料的に『古文苑』以前にほとんど溯り得ぬ現在では、かかる認定作業が余り有効性をたぬからでもあるが、文学史的に作品のもつ意味を考える方がより重要と思うためである。その際、樂府的性格を多分にもつ「遠送」篇より、「巖巖」篇の方が、一応「雜詩」と題されている作品として、文学史的な照明があてやすいであらう。

『後漢書』孔融伝には「著す所の詩・頌・碑文・論・議・六言・策文・表・檄・教令・書記凡そ二十五篇」と見え、『隋書』経籍志には「後漢少府孔融集九卷」と著録する。『後漢書』本伝の記載を信するならば、孔融には「詩」及び「六言」詩の作があつた。ただ『四庫提要』（巻一四八）が指摘することく、魏の文帝曹丕が黄初年間に遺文を購求したため、褒賞金あての贗作が混入した可能性は認めなければならぬであらうし、『古文苑』（巻八）によつて伝わる六言詩三首などは、その作風から言つても、偽作の疑いが濃いようである。

一方、「詩」が具体的に如何なる作品を指すかは不明であつても、『後漢書』がかかる場所という「詩」とは、四言及び五言形式の作品を指すものであり、六言・七言及び漢詩（楚体）形式の作品が排除されるものであつたことは、現存作品と照応しても、ほぼ確言できるところである。⁽⁴⁾ また酈炎伝に「……志氣有り、詩二篇を作りて曰く」として引くのが、「大道夷且長」篇及び「靈芝生河洲」篇の二篇であつて、ともに完全な五言詩であり、仲長統伝に「詩二篇を作り、以て其の志を見す」として引くのが、「飛鳥遺跡」篇及び「大道雖夷」篇の二篇であつて、ともに完全な四言詩であることも、『後漢書』のいう「詩」が、四言及び五言形式に限るものであつたことの一証となり得るであらう。

因みに、孔融の作と伝えられる四・五言詩で現存するものは、五言の「巖巖」篇・「遠送」篇を除けば、四言に「離合作郡姓名字詩」（『藝文類聚』巻五六 雜文部 詩、及び「古文苑」巻八）があり、五言に「臨終詩」（『古文苑』巻八、及び孔本「北堂書鈔」巻一五八 地部 穴⁽⁸⁾）があり、他に馮惟訥は「失題」と題する「帰家酒債多、門

客棹幾一作成行。高談滿四座、一日傾千觴」との五言四句を『古詩紀』に収める⁽⁹⁾。

「帰家」の四句はともかく、孔融には、その本伝に「著す所の詩・頌……」という如く、四言並びに五言の作品があつたことは、上述の経緯より推して確かであろう。しかし、孔融の詩作品は、南宋の章樵に至るまで、何故か論評の対象とはされなかった。曹丕以下、李充・摯虞・劉勰・鍾嶸より蘇軾⁽¹⁰⁾に及ぶ諸人は、孔融の散文及び詩を除く韻文(例えば「衛尉張儉碑」)を高く評価することはあつても、その詩作品に言及することは絶えてなかった。

ことに訝しく思われるのは劉勰の『文心雕龍』と鍾嶸の『詩品』であり、『詩品』の如きはあれほど五言詩の顕彰に努め、作品数の極めて少ない詩人の場合でも、論及を怠らなかつたに拘らず、後漢期に関しては、『東京二百載中、惟だ班固の詠史有るのみ、質木にして文無し』(『詩品』序)と言うのみで、⁽¹¹⁾孔融の作品には全くふれていない。これは鍾嶸が孔融の五言詩を、詩史上批評の対象たるに値しないと判断したためか、彼の五言詩そのものを鍾嶸が見なかつた(曹丕を除いた劉勰などの諸人と同様に?)ためかの、何れかであろうが、上掲の『後漢書』孔融伝の記事、及び『隋書』経籍志・『旧唐書』経籍志・『新唐書』藝文志に見える『孔融集』の九卷ないしは十巻という巻数から推しても、後者の場合の可能性は少ないように思われる。⁽¹²⁾とすれば、孔融の五言詩が批評の対象たり得なかつたとする前者の理由が有力となり、曹丕以下の諸人の論及が見えぬのも、謝靈運の『擬魏太子鄴中集詩』(『文選』卷三〇)や江淹の『雜體詩』(『文選』卷三二)が彼の作品を模擬の対象に選ばなかつたのも、このためであると、一応は考え得るであろう。

ただ、曹丕ら歴代の諸家から無視された孔融の詩作品が、具体的にはどれであつたかという問題になると、現在ではもはや解明のしようがない。四言詩では「離合作郡姓名字詩」が、五言では「臨終詩」(「折楊柳行」が本来の題であつたかも知れぬ)が、『古文苑』以外にも、『藝文類聚』或いは『北堂書鈔』にそれぞれ採録されていること

から、「孔融集」十巻本に収められていたのではないかと、推察される程度にとどまる。従つて小論が問題とする「巖巖」篇と「遠送」篇は、作者とされている孔融とは、一応切りはなして考慮するべきであらう。

三

まず「巖巖」篇と「遠送」篇を掲げよう。

巖巖鍾山首 巖巖たる鍾山の首いたたま

赫赫炎天路 赫赫たる炎天の路

高明曜雲門 高明なるは雲門かがやに曜ひかりき

遠景灼寒素 遠き景ひかりも寒素なるを灼く

昂昂累世士 昂昂いふからたる累世おのこの士

結根在所固 根を結ぶ 固き所に在り

呂望老匹夫 呂望は老いたる匹夫にして

苟為因世故 苟かりそめに為すは世の故むづみに因る

管仲小囚臣 管仲とるにたは小らぬ囚臣なるも

独能建功祚 独り能く功祚を建つ

人生有何常 人の生よに何の常か有る

但恐年歲暮 但だ年歳の暮るるを恐るるのみ

幸託不肖軀

幸いに不肖の軀に託して

且当猛虎歩

且くは当に猛虎のごとく歩むべし

安能苦一身

安くんぞ能く一身を苦しめ

与世同拳厝

世と拳厝を同じうせんや

由不慎小節

小節を慎まざるに由り

庸夫笑我度

庸夫は我が度を笑う

呂望尚不希

呂望すら尚お希わす

夷齊何足慕

夷齊何ぞ慕うに足らんや

(去声暮韻を純用する)

遠送新行客

新たに行だつ客を遠く送り

歲暮乃來帰

歳の暮に乃ち来たり帰りぬ

入門望愛子

門に入りて愛子を望むに

妻妾向人悲

妻妾 人に向かいて悲しむ

聞子不可見

子を聞くに見るべからず

日已潛光輝

日は已に光輝を潜めぬ

孤墳在西北

孤つなる墳は西北に在り

常念君來遲

常に念う 君の來たるや遅しと

褰裳上墟丘

裳を褰^かげて墟丘に上れば

但見蒿与薇

但だ蒿と薇を見るのみ

白骨帰黄泉

白骨は黄泉に帰る

肌体乘塵飛

肌体は塵に乗りて飛べり

生時不識父

生ある時は父を識らず

死後知我誰

死^{かまか}りし後 我の誰なるかを知らんや

孤魂游窮暮

孤^{ひと}りなる魂 窮暮^{きまつ}に游い

飄飄安所依

飄飄として安くにか依る所ぞ

人生図享息

人の生 享息^{あつぎ}を図る

爾死我念追

爾^{みまか}死れば我は念い追う

俛仰内傷心

俛仰して内に心を傷ましめ

不覺淚沾衣

覺えず 涙は衣^{うも}を沾す

人生自有命

人 生まれて自ら命有り

但恨生日希

但だ生ある日の希^{まれ}なるを恨むのみ

(上平微・脂韻を用う。脂・微韻は通韻——于安瀾『漢魏六朝韻譜』以下同じ)

以上の二首を『古文苑』は「雜詩」と題するが、その由来は明らかでない。仏寺の經龕中から発見されたのが『古文苑』の原型と伝えられるが、經龕中の文書がすでにそうなっていたのか、原編者或いは韓元吉がかく命題したのかも、一向に分明でない。もし、梁時は十巻本であったといわれる『孔融集』にも、以上の二首が同題で収録